へ13
2132
36

山崎文庫
宗藤文庫
特13
2132
36

自序

娼家ハ一個の地あり内證の
京事墨云ふ所ハ日夕嘲挾料屋
月夜に附て面掛人有里をそ
ゝぶの如き家も長南驛風と
らんく晴天ごの餐の昨日迄来る

36
33

もしと日ハ秋こ来る色男と傾の
日舘も晴て連もの癒の闇てくれる
も勝まてるもこりう白俵くゝ名ゝ
ハ沼ぐ十方クレモ知くゝと給妻の女房と
宝も陸奥竹嫁懸の契り富の土
かくなるまでも偽者いひも雪霜

如く山川草木こゝせんりひとつ
いくこをり沒とかおるをさ潮やゝの
大海の一滴を愧くゝで汲事ちくて

天狗山人芝晋交述

時于寛政十一歳
己未孟春

とても後く

三人一世話うん　とてもふ庶

盛史ゑ遠山　志んざうの口ぶり

中乃字のさうん

俳り　鄰座鋪

二人一世宮の巻

品川楊枝

芝晋交著

遠藤一さん別宅の情夫仕ふらの兵衛の
弟しいで宮まゑ高ゑ郎自宅ふなれば
今復ぐ自用なるべ今ぐこのれだらゑ人釈のち
いづまゑまゑめぐく徒ゑ茶番ふ有ゑ
実にい川乃手ゑ有ゑ人侍の江戸の方

[illegible]

[illegible]

十四 [illegible]

十二 こんやハ

[illegible]

トいひ

[illegible]

ト云ひ

[illegible]

この喰ちらしてあるものハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うる金はうらえ
のものいやがる 猪 聞くひてナンダ 呼とられまう
いとぐるひいまとうごくとりぐちがある
ほとめ乃ほくさすこーハ海びんとお
りめーせわくらと疲れ一度ナもまれ
よあるものいまの川 文 金さん多男
うるるひとんさ二度買うこ世間ハを
通てぐぜうんよ世ぐもを買へ〳〵ト鈔ハ
ちぬ 猪 いかもまれ知りろ
りてゐる 猪 ぐうてまんである 金 より移ぐらい

ぬんのうるひトいく 猪 でるるふいこが
ひくいのぜナンダ書くゆるゆりとや
うふーぬーのごんよ入るゆよ 文 イ、
ひぐるよ足うへ大叶の初る琴さんぐ
稲へ 金 ちんのとしふたまーー稲へ
引ちりなる
川くまま 猪 文胡さんけせいさるのいごとう
東中ーぬーのちんふいわづーひのう
文胡いうさい
ぬきうひとこる 文 その海ハさうぬでとひや

あのこ 傍 ことぢろうこ 丈 ようぼそう
ぐ 孫（トリ）しろと向ひて 孫 ていそ ナンダ かくぐ
どうまそかくのうくあるこうこ大ごう
ひごせ 丈 傍 さんそこかること
てくん孫（ぐ）ぐ女大月よいそうをうる
やくぐあらう 傍 ようそを十二ようつ儀ぐ
買うとくの 丈 そのもうあもぐ孫くのいもう
孫（ぐ）のこすこ車でまもと（山内今ぐいすまの組 新とくんであるこうじぐ）

金 ぐ門の表ひぐ神明さ女（ぐ）来りにまもこ
ぐこがいろは菜やに傍（やす）んぐあもこ生
いろく恨をこもたぐどうそ四晋中にぜひつ事
てまそくあるとひもた ウシテ 傍さんのぐなあう孫
用がのくこもこ氏のかあ母氏こも
とうんくもたこ 丈 こんやいまこぐどうこまん
金 ひ望ぐ国（ぐ）国（ぐ）孫（ぐ）傍つくまこくもて来
もかくぐ待（まち）そこんな 傍 ようぐこうこうこ

そもはいかるのあさ始四市花のつさを
ぶ 金 十二 そういふ氣ぐくいなすーさ 傷
ゐひゐみくそぐれりやせう文朔さんハ何
とゝ(ちく)して向(むか)せゐ(ゐ)ハ 文 ゐまひをとゐゐ
さゐくらさどんゐ形(ゐ)をても傾(けく)ぐうかき
形(ゐ)くくらさ 金 りいぐくゐゐゐりき形(ゐ)く
(モウ)ゐをとゐ時(じゐん)さトいちち 十 ゐてゐる 十 掛りく
かくさどくりゐさるく 文 それの舍(くら)

ゲ通り町の河内やゐ乃八さんとゐゐゐとゐ
ゐ今相まをとびひよとしくりきまて
ゐしおくくをくをくをまりやすくくせく形さ
いきやーやうぐやれゐまぬくひがなゐる世(サア)
ゐのゐまゐとれくくものハなすーく
文朔 いくくくくくくくぐくふくおくよくりのゐのハせふ宮ぐ
くくちのぐんぐぐくのふくくのきゐうごくくくくくがおくれる
のぐくくまゐくくをくすげさせめんちくのせゐつ
の給くりいさきぐくゐくくけ志ぐりのゐぬくくい
ゐくくゐ

勝みち　いろ〳〵をあらそふ心わせさきハびろうどのごく
ねんのぬ〳〵やのむすこと月ん〳〵ろくきいろのあわせふ
つゝのこゝろもんとすぐでぬわせろくつげ
ゑがりをあらくハさをくめをあわせふるをて
きてゐるゝくるくこのおびをしめろあさぎの
ゆぬぐひを帯ゆたゝさこまんのさびをたゝてあり
金次　帯こぶりんのあわせろいせーまのぬのこゝろく
ぎうゝとつけさやの帯をしめだゝをの
せろくふさ巳のさびえつまるさぎゆんのゝとんゝをの
さんとめのこすぢ　巳のゝをり

金　てうちんの火ゆきゝるぜ　文　ろむさんモウ
らゝとくぐねゝ　ゝ　モウ　灯ゝらゝ移ゝト

ぬゝゝくゝゝたゝぎちゝ
ゐけゝゝゝむゝのけつかゝら　かど　ハイぐゆんふまり
ゆまをふ　主　ごをゆでまいきてゝゝゝりゝゝゝ
ぐゆんすることめゆ　ゝ　ゝ移ゝゝ
ゝめぐろの方ぐりゝぜ　かど　ぐゆゝろゝん球
ゝ　ゝゝゝ

ぐもってかつてくもるまくかりだんふのつゝと
いろこハイ　かご　ハイりくそれぐらあるこうこ
乃かうがかきゆうがぢよとまと見へます
ひとなるが生（いき）をいうそこまんなの見ふたのひ
まとかどをそこれゆうちゆくうまを
ふ夜ぶうかきこぐらこうこぐりますト地
ひく　金　うとひさつふ和ちゆうだいとちち
うちとうのぐうゆ年ハ稼へる見こうし

モウ大まぢ　文　月乃あぐるあハふ金（かぎ）
く　猪　こふなる東を門へされ　鍋
ゆうくゆりハどうさくぐれうるぜ　長
石橋あんのおへうるる坂はあんちうや丹
州屋一カやゆやいの字仲物やうん
へゆそうとうこ成ア稼へ（モシ）あゆぜ
料理をうゆべなん稼へ　金　ひとをうん
るんしかごうゆまんひうゝんでまゆす

ぐやきこわうげふまことと
のぐやへ 文 初まり屋のさ 金 モシ かごと 仲
まりごごりませうわへ 文 大みりまるの
入ぼうみぐやさかごのふまりやうぐ おくしひ
ものこやぐほぐ 残をきこれへ 文 の事を
ちんぐやうきといひやと 残 百ぐやうやと
移へ まうり ぐりといひやと 訓 百の事
を 訓やうと 本 二百ぐんしやう まうさ

初の事を まるまといひやすおそくやうぶ
を 柳あるまといひやとを まるふへ人ま まるふ
みやとうう人へ 二のうぐ 見よやうまといひやと
 ぬしやア 三百の事ぐくやひうまうまの数
ちやうと 呼ぬへ 文 ちうと 呼ぬやせよ 度と
ぬる事を ぐんをとひさ まと 残を なまま
まうをまうう人ま まるまやすう人へ
るとちひやと人へ 持事を ぼう まと

やときものを「らん」帯を「ぐる」腰を
「孫三郎」目ろーとかうる事を「のぼ」と「だ
ってこいひやとかやの事を「ろうげく」い
「嬢ぐこいつ事を「ぞ嬢」こひやとやう
男ふりく事を「ぐりとる」ひとひるを
「やこ」ぐやまと事を「ぼぐせる」うとを「こよ」
りんの事を「まぶ」その外みこみこ
ぼくられやせん「文の事を「ちぎ」文をい

ぐ文「ちひ」文ふ「ぐ」文を「ちう」文ニ文
「かうら」文ほ文をめ「円金」文ふ文を「ちう」
ぐん「文ち文を「ぐう」文七文を「おき」文ハ文
を「ひのう」文九文を「ひるひ」文十文を「ちひ」
十ニ文をせんざいりげ「三十四文」を「ゆ三文」
といへ人なかうてい「ぐう」文ニ文を
ゆく「嬢」いぼきやせん仕事屋の物ちや
うとうせいこば「事」「おゆ文ニ」「ぐ」「ぐ」

さて赤 おもかるそ 春やさんざくろう
そくかまんぶりがまん めのど げてろと
あらせ らうんぢり かどとぢきりどぢう
中稼人 ちうぶりを ひど 俵 出し
金のゐ 小ゐとものやさとんまたんちう
ぢそる 物 物そろ宣をちらてあるの
物まへうのぞへそのゐ穴くとうてうちゐ
ゐうる物そうしゐ春のゆきやくとうて

物 さあしをゆめくまあうこもウへうゆでうゆ
菓やへちうのあうとうるをんうこのまあらは間
菓やと買へ稼へうれば出されやせん去色
ちうゆの菓やと伸ちう間ゆきゆうゆうとリ
文 モウ物 ほけ ゆきでうちなんとキ八野
そうちうくゆへうかうのうちきぢうぢ
それがうらうぢやう稼人ウ上 物 ゆかんん
こうめへのうとうき事 金 ちうぢうちうやうう

ごとごとんとそくいりなさいとう 文 ここグ
よりらうう 猪 ごとごとまるしく 是は後の川の入口と
なす事なるべしまで
足垂ぬんふるごとこんそろひのきものときくたんごうと
みつあつくそくくるふりふるぐしくゆう
そしとんき本屋のときくたんが新へ通るざりさうう
ちんどうれどもつぬうをしくらきなとこりさ
よくてしひとゑそくくるくしたつくと猪屋よりく
猪ごとうくをまひつるふのをとんハ箱つるふやこと合
人ふりりくたりりさうるハ 文 あるのうへハいち
やとまいつるやおこうんハ
どんくるん 猪 ぜとうくること丁目じとうそう
とこるこれをいひくたつぐる 金 ハぐるんまるる

ごとごとんとそくいりなさいとう 猪 ごとごとまるしく 文 なしく 猪 たゆうるのたつこと立
ぐるれどもいくとゆくしぬ 子 おまとにたつぐう
猪 ぐるれまー 文 はとあるのるゆとるるるぐゼ
猪 ごとうぐかつぐの 文 ちまるくらいとまるこはかうこ
ちんるごはうこるぐ物りねこうるめぐゼ 文 このうん
どんとんそうのうるとつをとうごこんるす
こうまこうりるのを物とまくこんるまるて和て

をんなとりつかれこゝろ道々をたちうく
出てくこゝろ〳〵ぬくもわるまぢる無しひ
るのごとくりゆきとこゝろあるんぞでくち月と見か
ゝひ紙とこのめをさをそのるとそれを見のそた
ゝのぎとをとそとりこゝ作にあがなひとゝいをかる
て武のゝこゝ百こてゐのの神とこのものをまゝちく
こゝ出ひてそれゝこゝ考こゝるをゝとすをゝ
のすがくる 文朝 がかくこゝへかさまでかられるゝ
ゝこゝ考こゝくこゝりいゝてこゝのむのゝ 金 がこゝくこゝ

ひをきこゝるのがきこゝひゐる方かゝくこゝと
いこゝくゝ出こゝるきこゝこゝ 八月 こゝ
こゝんへこゝるまがんゝくこゝ門ゝ月のこゝ
ゝうゝゝこゝゝゆこゝくこゝんゝゝこゝゝゝこゝゝ
こゝゝこゝこゝをこゝひのこゝくきこゝこゝゝこゝゝこゝゝ
 西 こゝゝこゝゝこゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝゝ
ゝこのこゝこゝこゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこ

いろみ〳〵ト〳〵ゆめこの孤てのうぬぎこゝろをを
ゆしとゝゆる 金 文さんたをよさいもゆるめゝゆ海
者を 文 ゆひ穴今のをョ 万乃 八イく 勝 るのよゆ
つらゝいつゝゆちをとゝんとかんゝへてゆるゆ恋へ
おきて 八一向 ゆる きゝて 文 休やをををりつく
きるゝて志ゝさひ次ゞこのよちをこんるひゝゆん
をゆゝ 文 ゆびの生れゝりゞゝゝん称ゆを きく
ホゝゝひのゝト次ゞちをゝりきをゝゞゝ

さうゆゝてよゝひせう抜つゝゞ姫つゝゞち
ゞゆゝゝをゝをぬゝゝのゆゝ流ゞゝとゝをて
ゆゝゝ蘭をゞゆをゞゝらゝ抜をゝゝひゝゞ
とてゝゆゝらゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝる 文 ぬゝゞゝゝよ
ゆをゞゞをゝゝひゞゝゝゝゝ門へ抜ゝひゝゝと
をゝゝひゝ門ゝゝひ者海者抜ゝく出る
より抜をゝ抜ゞゆゝてゝる 勝 ゝのゝゝを
とゝゝゝんゝゆゞを抜ゝゝんひゆゝをゝゝみ

も有でんよ白魚とそのようくはくさよ
ゞゞかくこそ咎られねくひごん助の
ゝんやもゝの方のうんざきをんぴくくひやアぬ
こん助とめゝのるうんざこん 猪 久羽さん酒をそめ
さくのいくすきをんぴこんたのるこ
猪へ久 文 ゝゝゝの手紙くとさつくおそ同ざこと歌
猪へ 物をこいくのうとめやせうト云ナレト是
ゝをおらうきのくめ おきて さんとやくて きこに
物さくやゝやう 猪 まづく きて さうのト

さくり〳〵ゝのくぶよにのぎませう 文 さやうに
ゝれべいくどくまさくりくり 猪 ゝゝ さんやくく
くめ 正物さくやんせう 文 ゝちやゞよきくひ
さくめ みんなまいばのくさを どくやゝふくくまどくたる おきて はるくく重成
どうさくるのくこいるくさゝ 猪へ ナトおそのいく 猪へ さす
猪へゝゝゝ

[illegible]
文 さあうめ[illegible]へ参りました きて どうぞ
かういふとおくひはるの人 傍 小夜ふけて後を
いくどとまるく耳ふとつゝ傍さへ小夜ふけて
[illegible] 傍はまつて来て [illegible]
[illegible] 文 どうぞ きて まつと奥
よおくあさんくあくいきねくさまつてよ 傍 おく
[illegible]通り服はつゝ通りしかおりてさこの
[illegible]通りとつゝ
文 こんやはたゞひのうちとうそこはせんはかり
[illegible]

きてくつちのでもすきれば[illegible]
[illegible]ぬけてきてあうすれば 金 八月はさんはい三日月ぬす
[illegible] 八内 なぜせへ 金 ちひさいちもとん
さとうる 文 三日月ぬす[illegible]をんくはつゝ
ごとこの極 多 [illegible] 傍 はさへ小夜ふけ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
しと二階へ文朝[illegible]

[illegible]ことはの別世でなんとやらひ 女 侍さんでい
侍 お梅々 梅 こつちへ来るのを[illegible]
あるとんとはなさかきを見世ぐちにとらえて
めつさとおひとめぐとし外乃人さんでなるの
ごぞりやとうばまるあやしめ情のわけ知
あとを和みる明ゆやくいる 侍 侍の後へとはめへ
[illegible]さと彼立 梅 こちら状通の付とを生を
らてへとはかるこんこわるこうられ[illegible]

と[illegible]ていらるてうど去年の今ごろ
ごぞりやしさらうあめくと内くせいてあげ
後のと若ひりのおのこと唐せくあのいる内とう合
[illegible]ていてひぎそ朔内しやうそれか[illegible]
ぐさあくこの川流乃[illegible]やへかくかるうちも
ごうそみぐ[illegible]せてあとへぐも何をいつも
[illegible]そあすちは内ら[illegible]ぐく[illegible]うも[illegible]
こんあくとうるうるごぞとぐ[illegible]るる後へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さるひでんでとうふのまくとくとうあ
ね寝ると踊りとうるる　きく　猫うんしゃうめ　文
ナアニ　ねめくのまま猫くうちゃ　きく　猫れねとい
のうくいのんまうり　ゲ　ねのうひ　文　かうじく
かうぎたうまひかうでうやせうそれでも
おめくいうくおうひうるとうちなうよ　きく
かんうんしておんるうんしのやまうんとう
文　かんうんのうう猫くのでうねうくでかうはん

すんしのまてオダこのうきでう猫くう猫
せうぐうんぜうこのまうろ風でせうぐと鳴れい
ちうく
ときでねうれまうまあ寺きと空くうる猫くう
トえうろぐ走やまてる　きく　ぐまうくう猫うん
し　文　猫てもうのでうきうまとう猫くう猫やせう
トねとんをりうるおきくいてうるをくくくくくと
ひうけてあうのくう菓をりうくくくくとんつけ　その菓を
すにいうでえるいねく　きく　丹ひうのでうねげん
せうこうをおひきなんくう菓うこでれんと

よトかゑをとりぬーへどうやうやうとやうどョ
よくぶんをよ 文 今ハかう
いふゐがさをありやんをけちげん(柳)みを
いなんどちくしやうめたるくと業旋(ちやこうん)
酒ごのるぜ 聞く 拝ものなんーだらし
ひようヨウぬーいよくいさたを考る
さる 文 みこしの時ふんよくいづくを
せるものを 聞く どうしハかういふ

云く 文 ナニダメ どうやハ何とかうやハいつさ
ものだらさん業をやハいつさ 聞く 考らん
せん 文 考らんせんとハ考りふせんを
加川ゑまうくへと考やだり立てゐ
ものりどーなるむつとさハ伊猪ハ事ゑ
ゑとり称さらぎゑやくらてもゐのふてうが
考ぶまつくいるゑへ考らうくぶまて
ゐるおりをらうを八つをの返おとうと

いつとのぐくのちくなるひくくるる猪八耳を
さ度ーてゐれバとうかりざ～紀の文が而へ
とうるゆゑん【ろう】いろ～はにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせすん
ぜ枝おそのんどの紀とくすの稼まれたりまく【ろう】おきくさえん
ていきくまるようへ【きく】ゆいをるんん～ゐんそ
果うへ【ろう】ゑるまくるのんどみをとぐをくく
ゆんなんん～ゐうへ【きく】アイとぐきゆ～ョ
【文】ちんとおそのうるるされまゆ～ゆ果代ろ十二文

【ろう】ゆゑんいきだんどのうちんちんち大きぐ記
さ三【文】ふうさぐくゐ寄ヨ人くるひさむ【ろう】果よ
【きく】ゐどことをすゆ角て出ーこんやいおゆくい
ぬれさんえ【ろう】カノ世ョ
【文】いとき毋くとんぐうさ母の事ゆ和へ
ていろいはほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせすん
かの母ろくぐいんそきぐとあんとよぐれっ
てへウ【文】きぐとあくひのーとうきて

きくとのごく猫くまをきのみたべといふる
日本ごとにちうごく【ろう】出ちくさんことをう
くまをだまへいく事をきんてゐるとらをいや
みゐんうれべいくに【きく】ようひうもぐそう
いろくゐるこゐなめくひう【ろう】又ちうれ猫
うちちあくりゆせう定めてまつてゐるぞ
ごぞうやせうきをくしたくひうトうれも猫
きうめこれちくきうあいやくゆせちかん
ぐてうにいうてきうゐるあとう今【文】アリてを

七ちうのうぞ事やりしとき〳〵せいのちうひよ
ぐせ日光の天井のくとのすをとりてゆるこ
今にうるぜおーひ事ぐゆせアるにて根ふて
俗ひさせるとちぐごく入らね又【きく】お
りくさんそれでもゆれてちよ【文】ゆれの
ゆれ猫のくいそぐひ猫ぎ事の肉をとんて
ゆうにはきれおちだくさぐ川ゆりくも史の勇んの
ひうげりそく ひちじぎさちらのあと耳をおどろりなんぐん
ぜんゆうさ猫のぼら【くめ】今さん猫をさんること

今ハ[illegible]を[illegible]をそうらうてくるな
るべいのりぐそひぐそれをうへちぐひぐそのまき
われてふねく白夜ふ百枚のまくの数いろ
男ハ山ぐどみ年ぐいらていらぐゆうるさぐぬく
ゆ物うれ物ゆくまたんぐいるぐんてゆきぬ先
ふるる世 くわ そういうるいくいるさる
をうそぐといるるのく（小さきぐ年をあるめてあるゆうすぬく）
ぐぐぐくそれをそれ物るんそれうきまんせん

りれべみを出さるまるゆうりを走ぐいるるれ
ゆせんぐうぐそれをそれを通てゆんなんな
ユウ ナりくどゆり物ことと 合 八枚よぎふるる
まくくそそ移へりをする 勝 いくれぐ
真へくいるく移うれぐ白ぐかく紙をあぐ
門くるる物うくらをぐうくなるひてくる
ゆりとと移ぐ物うをする 八浮 ゆりく白ゆ
モ三豆 勝 モウ何年ぐ八 合 今今をゆゆる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ざ[illegible]なりまく[illegible]
八 ぬ[illegible]ちはとまんを[illegible]
[illegible]りやせんぬ[illegible]りぐ[illegible]
ちやア[illegible]
ナント[illegible]
[illegible]それ[illegible]
[illegible]
[illegible]

きへどう[illegible] 猪 それ[illegible]
[illegible]
[illegible]
三 なんぐ[illegible]
なりやせんぐ[illegible]
[illegible]
[illegible]

おすくよ春さてとろく酒をのこして
と者をくひる八汐さんへ今稲さうこのこの
胡ぐなるこ作物さん志稲くう足出ていへ
形一 物 そうどもいかるうこ今ぬけ足て
きくく八汐さんとうこ 物 もし外のちしへあるめ
かくそれくあんどさんてこのさ 清るのもこさへるき
てもへ云年きくあ もうすとこんるく 物
うこ行ま八七ヒ屋(母)ひ年さそれいてがおりへ

かへ 物 だこうがうめ行をあのこうこ 物 よ
ても九一年ひどいう稲へこのをうこどれひで 勝
ほめ弥太行しが有ることいをあるざ 物 ぬしへ
くるこんびにむりだんろういなんをなれわとこ
をを云ひんをにそしてカイてへこうこ行へ
をそのあをこひをちりこくあ年さこうを
はをくくあをく 物 ひ年をあてをこうひ
カ屋示耳 ほこうこ人ていあ ちこうこ
ひこくこうこ ちこうこん まこうおりてざき

みおくりをいたしたるとき人々みなそのかたちをかへ
ものうかれくるる足世ろろをたてきをひくいけ〳〵内〳〵ものをかんさしのさて引ぐすきをつぎきをおのをあいの
つきものの行ろく今八ものきをうきくさくさくもさげさくてもきをのるい
ろろりわろくさく外八年〳〵れけさくさくハ年ぐちまりてて
三ロ人ハれくさくをあるくおろりわりぐのさむをを
ひくろりるせ四ろ二ろ外肉つをを頃ひろろくくろ
天をまつてそよけさむさんすりくいるふトいろ形へ

おその

2 何てあろんを

その 歳さんよさりきるこのつ
あらまいでんカノが四人へつまでくそりりてある
くとつよろなぎをみをさとおのりてるやを

2 がうきた情をたくさのよ

そのアノ夜ガ上
ろ幸右さんざアノいろんまいあんまひぬえのね
ぐきさ人様へどヨトつろうち頃の
あるきろず

2 それろうれ

そのしろんぐ中人様へおあるるよぐを

そのけろ
人ふみをそのんぐくそれろくたれろくたキな貝ふいひ
中ものろんでもこんやかりぐをを様へをれば
なりやせん

2 おろくめしぐもくひろんろう人何ぞ
おろてまくこのぎんせをを

その

何むろんをろ

何ごとをきゝてもこたへやせんあゝさん
ト（ゆつてもおこたるなんゝ）みをもたゝてやらるゝござ
ることやとゝ　四　そんなら下へ（ゆんさとゝ）風をひら
ゝ（ゆうにたゝるさんゝ）ヨトトトへ　その　たれつてよまする
まごごらうをとうゝくきてアノ夜ゝ毎ゝクトヘで
氣をのんでゝある幸吉といふ男ちやうの通りをのぞくゝ
ばかりきゝもうく氣ぐそもうく男二人つれさするゝの
せんとゝ（ゆうて）あるもゝ中の男の男のゝゝを　地獄　今の内さ
いけるゝ（ゆ）ゝ人ゝゝゝの男の幸吉ゝゝゝ
ゆをまちぐゝなるさんゝ（ゆ）ゝトいひるゝゝゝをそつとゝ
て出でゝゝいさちゝゝ

八十四　いろのさもいつぱい
まつて廣へさうゝ　猪　コレはあるまいてうまぎんは
なせんなんか毋まごごやうるやうとゝ
毋ゝうゝ云もごごりんご　八　なんごゝまんて
毋ゝるゝ何もそんるふいゝるゝるゝこゝ
やせん　猪　いゝ毋でゝ雪ゝゝ来ゝねで今ごゝ
まごやうゝてきのゝひゝごきりのゝ今ごゝ貧ゝ
かゝうゝ夜食ゝ喰ゝくゝゝゝアナセの年ゝゝゝを
笑ゝうゝ一度ゝ始ゝゝゝゝの猪ゝのごゝさんる

やうにかのゆせてこれをたべたるとたべたるあく
おくゝあるようなものでこうおりんでおるうるゆうゝ
ふるのでらるゝまぐはぐめぐらうおくゝとんな
ゆゝとゆりにくるとあるとのあさわうあんさるに
きとうをしてとゝとゝ病どうけゝ
八 ねりくゝといくぎんんなくなるそんなるたきう
ゆまをいうてもおるりにのぐとに行くぐとを
いくゝるとをいうぐらいくぐ世ろうもあるぐのゝ

ものゝいくゝぬく 猪 ものゝいくゝとゝとゝきるゝ
ゆゝでいうぐのあれぐとゝとぐゝとゝくゝるゝ
若 ゝゝおものゝとあゝとゝゆりはゝうゝわぐけま
ぐゝうゝぐぐうまと 猪 いくゝゆうゝ猪ゝぐけるぐ
さんまいゝとゝとんぐんとんそばゝすいんをくい
ゆゝせをしゆゆうゝふゆぐをうさげうゝるゆう
はをゝゝぐうゝいる 文 ものゝゆゝ風でゆるゝ
しゝゆをゝゝるぐをうゝゆるゝゆゝかゝ

らくとうてをさでを 傍 うたまてまでめてあらん
罪あくの乃うの門乃ゆをたの間へどくふ何ゆを
物りて二階ゑかしの乃ね間がみるまでをを
ねゆさうかうてをおりうらをいが寅乃ちちく
まんじゆくと付くををうてゆくうゆをを間く
ねゆをとを品門浮へんじらがをれをようまでさ
んををうるゆをとうあつさ 若 こんどんの事ハ私た
おのづをなをれくちとれます 傍 さうゆがとと

うういつゆをバたのけきくこんやハ稼てゆふ
 さうゆがバおゆをとこたのをげます 文 稼
さんゆをとを稼へとり
 傍 はゆうの腹ハ稼がんてうゆをゆをうゆをゆをゆを

庄つくりそへ 庄 なを江戸はまの日あんなるものはいる

さん きてしのさるひるすぐといふの新へ 女 来て後ろ世うるうるくり

さん そんなる園中に入るべく大ぶるすすり 酥

卧砌場君笑莫くり 女 おもそうそう

んしと庶へくるる

のうるひやうてんとそうそうそうそうの附 冷艶金欺雪

五言四句うそく詩と邸席に作

餘香住入衣 手光皆堪賞 紫紅粧

二帰 女 ふるくんくる足はなんとふるるる

食へ さん 唐詩さ 女 かうるとはあるる

ろうの名ろく さ 今めるを歳へ今西を汚ふ化

しの 女 沢といふ到へくおきうせなんしけ 先 先

えんとはあめくやさしひとうまいくるを歌

とぬしのたうの雪の年よるのをそこ抜さよんうれ

ちちる夜へ今はきるれ月りの国ふ今るさ降先ち

まちはるうこと海ざけだうこ

ひさ和子慶とそのうこ子ふ人が有てうさうサ 女 そ乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゑとつくる墨ゑ郎りよいまゞ郎
ゝ杉の末千一のづゝ稚末ゝ
ちりぢあチヨイと東縫きゝ郎乃
蹴をとりまきまつる

天狗山人の姉

まき木蒔のへ速

清水蔵

蹴蹴

御殿山うゝ谷底、見まへ氏乃
崖屋のゝ巻ゝの冊どん美を郎
ゝゝ我朝の姉庶ゝ一のそんぞ見
唐乃俗父ゝ異清ゝと伸

てんぢく至りあぼうも娶をとちや
きん事を願ひし親父い後
生をとゝく息子い孟を云
人ゝゝ西里よ遊べぞんぶ
偏に山やまの猿ふひとゝ

やまゝゝゝんゝく鬱屑竜変
故郷集めく一冊とゝまづ
三本杉鼻る山人何義採作貝ゝを

湯屋芝住筆取

品川やうじ　満尾

芝晋交著

風流今様歌 小本一冊

此書八青楼の一さん西川屋の穴をうがつ男まんまとこの書ぐう面白さ心合の意味にてうるさとちう

近刻

同作

辰巳吟 小本一冊

此書八客とゝめらの深川と其中町に居いまくらの中ぐるまるめ者庚申ある石のきさらるもとの物ゆと著く事ちくのり

近刻

追〻新板出し申候

寛政十一巳未歳 正月吉日